

14 番（小川義昭議員）

今、市長のほうから今後今すぐではなく、今後の県の動向や広域の整備、それから費用の平準化、そういったことを見据えながらこの松任総合運動公園再生総合事業の計画策定を行い、そして進めていくという答弁をいただきましたが、どうかぜひ馳知事とタッグを組んで、県も取り込んで前向きに松任総合運動公園再生総合事業計画を進めていただきたいなというふうに思いますので、よろしく願いいたします。

次に、小・中学生の通学かばんの重さ対策についてであります。

偶然にも今朝の民放で重過ぎるランドセル問題が取り上げられ、全国的にも話題となっております。奇遇かなと思いました。

ここ最近ランドセル症候群という耳慣れない言葉が身近になっています。ランドセル症候群とは、ランドセルの重さによって腰痛や肩の痛み、ひどければ抑うつ、心身の不調を訴えるなどの子供の症状を指し、社会的な問題として教育界の新たな課題となっています。

そこで、本日は将来の郷土を担う子供たちの身に降りかかった放置すべからざる現象として、小・中学生、特に小学校低学年児童らの重過ぎるランドセル問題を取り上げたいと思います。

このところ私は小・中学生の保護者の皆様から小・中学生の通学のかばんが重過ぎる、何とかならないかといった御相談をいただくようになりました。実は私自身も小学3年生と中学2年生の孫を持っています。日頃重そうなランドセルや通学かばんと部活動の荷物を同時に携えて登下校する孫たちの姿を目にしており、孫の母親である娘からも幾度かかばんの重さをもっと軽くしてあげられないかといった訴えを聞かされております。

そこで、今議会の2番目の質問として、小・中学生の通学かばんの重さ対策について市長及び教育長の御見解を伺います。

小学生といえば一般的にランドセルを背負って元気に登下校する姿をイメージしますし、最近のランドセルは毎年カラフルになるだけではなく、いろいろなデザインや機能が生まれて進化しており、特に軽量化の工夫がメーカー各社で目立っているようです。それなのになぜランドセル症候群は起きるのでしょうか。

ランドセル症候群という言葉がひとり歩き始めたのは、ラクサックというナイロン製リュックの販売会社であるフットマークという企業が行ったランドセルの重さに関する意識調査がきっかけとされています。この調査の結果、児童のうち3人に1人がランドセルが重いことが原因で登校したくない、通学したくないとして通学を嫌がったことが明らかにされています。

また、天使のはねで有名なランドセルメーカーの業界最大手セイバンが2018年に行った調査によると、ランドセルに入れた荷物の重さの全国平均は、1年生で3.6キログ

ラム、6年生では5.4キログラムという結果が報告されています。これはランドセルを含めない荷物だけの重さなので、ここにランドセルの平均重量1.3キログラムをプラスするとさらに重くなり、低学年でも約5キログラム、高学年では約7キログラムに近い荷物を背負って登校していることとなります。

いずれにせよ、子供が背負うランドセルの重量は昔に比べて増えており、特に低学年の児童にとっては登下校につらい負担を強いる状態となっています。

進化して軽量化も進んだランドセルが昔に比べて重くなった主な原因は、中に入れる荷物の量が増えたことにあるそうです。その背景には、脱ゆとり教育があると考えられています。

15年ほど前のゆとり教育時代は、授業が削減され、学習内容も軽減したことにより、教科書が薄くなり、ランドセルの重さもさほどではなかったのでしょうか。ところがゆとり教育が改められ、脱ゆとり時代になると、授業は以前の詰込み方式に近くなり、教科書のページ数が数段に増えていきます。そればかりか教科や教材も増え、小学生の英語の必修化、プログラミング授業の導入などが追い打ちをかけ、私たちの小学生の頃にはなかった教材や荷物を今の児童は小さな背に背負う結果となっています。

さらに言えば市内の全ての小・中学校では、全児童・生徒にタブレットを持たせ、デジタル教育の導入、普及を検討しており、従来の教科書にプラスして決して軽量とはいえないタブレットをランドセルに入れるなど実に理不尽な印象がぬぐえません。

また、ここ最近ではコロナウイルスの影響からかほとんどの学校で水筒の持参が求められ、児童の荷物をさらに重くさせる結果となっています。

これから暑さの厳しい季節が到来しますが、私は登下校時にマスクを着用して重いランドセルや荷物に身をよじりながら汗だくで歩く幼い児童の姿を見るたび、いつか熱中症で倒れてしまう子供が現れるのではないかと心配でなりません。

こうしたいたいけな児童たちにこれ以上の肉体的負担をさせない手だてとしては、自宅に持ち帰る必要のない教科書、教材、楽器、習字や絵の道具、さらには決して軽いタブレットなどは学校に置いて登下校させる置き勉や法律が定めたものとは思えないランドセルに固執せず、教育委員会オリジナルの布製バッグを導入するなどの対策が考えられます。

この置き勉については、令和2年9月の会議において田代議員が小・中学生の熱中症対策についての質問の中で取り上げておられます。当時の松井教育長は、文部科学省の平成30年9月6日付の児童・生徒の携行品に係る配慮についてにより、児童・生徒の携行品の重さや量への配慮を講じるように示されており、このことを受け、各学校では家庭学習では余り使用しない教科書や資料集、技能教科の学習用具等は学校に置くなど取り組んでいるとの答弁をしています。

あれから2年近くが経過していますが、その後にタブレットも増え、ランドセルの重さ軽減を訴える保護者が増えたような気配から察するに、教育委員会の取組は掛け声倒れのようにも見受けられます。

これに対して国内では、幾つもの先進的で柔軟な取組が入れられています。

岐阜市立岐阜小学校では、置き勉の自由化が導入されています。岐阜小学校の保護者たちが校則を変えるためランドセルの重量調査をしてほしいと学校に掛け合ったところ、校長が調査を待たずに置き勉自由化を即決したというものです。

以下は岐阜小学校の校長先生の談話です。

重そうなランドセルを背負って登下校する子供たちの姿を見ていましたから、調査の間にも震災などが発生した場合、軽いランドセルであれば頭の上に乗せて防災に役立てたり、あるいは素早く置いてダッシュで逃げることができます。ですから即決したのです。自宅で使わないものは教室に置いて下校するというのも合理的で当たり前のことですよと言っております。

さらに、この校長先生が職員などに配付したプリントには、低学年の先生方には指導することが増えて申し訳ありません。しかし、児童の安全や健康は全てに優先しますと明確な指針が記されていたそうです。

重い通学かばんの問題に関しては、軽量化を求める風潮に対して体力がつく、忍耐力がつく、昔からそうだったなどという否定的な意見もあります。しかし今現在、児童・生徒たちを脅かす健康被害は放置できない社会問題となりつつあります。

白山市においては、重いランドセルやかばんを背負って通学する子供たちをこのまま見て見ぬふりをするのではなく、子供たちの健康や安全を守ることを第一に据えた新しいルールをつくるべきではありませんか。

成長期にある体に過剰な負荷をかけるのがよくないことは明白であります。小学校低学年から中学生の児童・生徒が背負うのに適正な重さは、2キロから3キログラム程度だと言われていています。

ちなみに私の孫の小学校3年生の女の子は、体重が22キロ弱で5キロのかばんを背負って毎日片道30分の道のりを、また中学2年生の男の子は、10キロのかばんと部活用具の入った2キロのセカンドかばんを背負って通学しています。私は、そうした孫の姿を見るにつけ強く思います。田園地帯が広がる白山市には、通学路が遠い小学校が幾つもあります。何とか白山市モデルと言われるような画期的な対策で将来を担ってくれる貴重な児童・生徒たちの健康と安全を守っていただきたいと。

ちなみに5月1日現在の白山市の児童・生徒は、小学生が6,134人、中学生が3,258人で、約9,400人の児童・生徒が重いかばんを背負って毎日通学しています。

そこで質問します。

1点目、現在全国規模で小・中学生のかばんの重さに対する対応が問われていますが、本市として小・中学生の通学かばんの重さについての問題をいかに把握されておられるのか、またどのように問題を改善していこうとされているのかを教育長にお聞きします。

2点目です。

子供の健やかな成長を守るためにランドセル問題を理解、改善していくことが極めて大切であると考えますが、市としてどのような対策を捉えていくのか、市長にお聞きします。

以上、2点具体的で前向きな御答弁をお願いいたします。